

「有言実行」の土づくりが高品質へ



〔ブドウ栽培は土づくりです」と強調する藤井一彦さん
河合町穴闇西山で

県内屈指のブドウ栽培地として栄えた河合町穴闇西山地区は、現在の大坂府柏原市から山下松太郎氏が大正12(1923)年にブドウ畠を求めて、西山地区での開墾事業を開始した。それに現在の藤井寺市の藤井常三郎氏ら3人の協力のもと、開墾作業が着々と進み、昭和9(1934)年には約13haの果樹園を造成して基礎を築いた。その後、宅地開発や後継者難などが、今年は「ブドウ園開墾100年目」にあたる。常三郎氏から数えて3代目、藤井ぶどう園代表の藤井一彦さん(83)に話を聞いた。

藤井ぶどう園代表・藤井一彦さんに聞く

—就農した当時の経験内容はどうでしたか。

私が就農したのは昭和33(1958)年。積で作っていました。

大阪府立農芸高等学校のブドウ専門科を卒業後すぐです。種ありのブドウを180kgの面処理が種なしブドウを類を作りましたよ。

実現させました。ブドウ栽培にとって革命的

一種なし化による収穫

その時は巨峰なんか房可能な大きなボイラーを8台入れています。今までに120種類を作りましたよ。

當時はいつも「手を抜く子の一人が良くできくな、絶対に1の次は

房可能な大きなボイラーを8台入れています。今までに120種類を作りましたよ。

今はシャインマスカットを中心に巨峰、ピノ水を控えて、できオーネ、クイーンニーのだけ土壤水分を少なくします。土づくりをしておくと、夏の乾期においても地下5mのところでは、ほどよい湿りがあります。それで、品質評価は高いです。

河合町穴闇西山地区のブドウ園

—ブドウ栽培へのこだわりは。

今は完全に直売一本

—収穫時期は。

土づくりです。よそよりも味の良いもの、うまいもの、ひと味違ったものを作る一ことです。土づくりを始めたのは昭和60(1985)年ごろからで、起伏のある地形をトラクタードラフトで荒起こしした

—直売は週4日です

面積も160haほどに落として栽培しています。8年前にやめました。つむりをしていまして。果物は10年先を見据えての土づくりが重要です。

後、かなりの量の堆肥を3年間投入し、掘つた溝に有機物も入れました。果物は10年先を見据えての土づくりが重要です。

—10年目の思いは。

今までで自分が良かったと思うことは、これと決めたらそれを徹底してやり遂げること。人間「有言実行」必ず成功します。横道それたらあかん。1の次は2です。2の次が3。基礎勉強を順番に

たことにより、技術改善が図られました。ブル期に頂点を迎えたのですが、その頃は年間4000個ぐらい宅配便で出しました。

—ところで、ブドウ園を経営されてきて苦労されたことは。

戦後間もない頃だったので、親を養い家族を見ていかないといけ

ないという状況で、自分たちの家族が犠牲になりました。子どもが小さかったです。その中の

オーネ、クイーンニーのだけ土壤水分を少なくします。土づくりをしておくと、夏の乾期においても地下5mのところでは、ほどよい湿りがあります。それで、品質評価は高いです。

昭和21(1946)年に建立された開墾記念碑

息子が2人います。が、「継がんでもいい」と外に出しました。今は長男がこっちへ帰っています。土地は残っていて、どちらかというと、孫にかけています。今は高校3年ですが、強要する時代と違います。もし作らなければ、棚をつぶして更地にします。それは徹底しています。

—藤井ぶどう園の承継については。

息子が2人います。が、「継がんでもいい」と外に出しました。今は長男がこっちへ帰っています。土地は残っていて、どちらか

というと、孫にかけています。今は高校3年ですが、強要する時代と違います。もし作らなければ、棚をつぶして更地にします。それは徹底しています。

—藤井ぶどう園の承継については。

息子が2人います。が、「継がんでもいい」と外に出しました。今は長男がこっちへ帰っています。土地は残っていて、どちらか

というと、孫にかけています。今は高校3年ですが、強要する時代と違います。もし作らなければ、棚をつぶして更地にします。それは徹底しています。